

2017年9月3日 主日礼拝 礼拝説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書 22章 1～13節

説教「人の計略と神の備え」

日本キリスト教会鶴見教会 牧師 高松牧人

過越祭そして翌日から続く除酵祭は、ユダヤの一年で一番大きな春の祭りです。主イエスの苦難と十字架の死はその祭りのただ中で起こりました。たまたまそういう季節だったというわけではありません。これらの祭りはイスラエルの人々がその昔エジプトの奴隷状態から神によって救い出され、神の民として歩み始めたことを思い起こす最も大切な記念の祝いでした。まさにそのような時、その昔、屠られた小羊の血が戸口の鴨居と柱に塗られたイスラエルの人々の家を、エジプトの地を撃った神の使いが過ぎ越して、イスラエルの人々は裁きを免れたように、こんどは神の御子イエスの血が流されることによって罪人を救う神の御業が成し遂げられたのです。

すでに、祭司長と律法学者とは主イエスを殺そうと考えて、よい機会をねらっていましたが、民衆を恐れていたため、簡単に手を出せないでいました。主イエスの教えに聞き入り、主イエスに期待をかけていた人々が少なくなかったからです。しかも過越祭になると、エルサレムの都には各地から巡礼客が集まり、町中が熱気と興奮に包まれます。ですから、彼らとしては主イエスを何とか早く片付けたいと思いながらも、この祭りの間は避けた方が無難であろう、と考えていたのです。

ところが、思いがけないことが起こりました。弟子の一人イスカリオテのユダが、「祭司長たちや神殿守衛長たちのもとに行き、どのようにしてイエスを引き渡そうかと相談をもちかけた」のです。突然天から降ってきたような話に彼らはすっかり喜びました。彼らはここでついに神はわれわれに味方してくれたと思ったに違いありません。

イスカリオテのユダは「十二人の中の一人」です。「十二人の数のうちに入っていた一人」という書き方なので、十二弟子と呼ぶのをちょっとためらっているのかも知れないと言う人もいます。しかし、彼は正真正銘の弟子であり、主イエスは彼を徹夜の祈りをもって召し出されたのでした（ルカ 6章 12～16節）。主イエスの最も身近にいて、寝食を共にしてきたのでした。彼の裏切りに至った動機については諸説があります。けれども、誰がどんな説明したとしても、そこには解けない謎が残ります。そして、聖書は私たちがすっきり納得できるような謎解きをしてはいません。ただ唯一ルカがここで説明しているのは、「サタンが入った」ということです。悪魔のとりこになってしまったのです。あの荒野の誘惑以来、しばらく離れていた悪魔が再攻勢をかけてきたのです。それが主イエスの十字架でした。

このときユダにサタンが入ったという言い方は、サタンは彼のみならず、他の弟子たちにも、そして私たちにも入ることができるのだということを意味しています。サタンはユダに主イエスを殺させようとしていました。しかし、その思いは私たちと無関係ではありません。私たちの罪とは、神と隣人を憎むことへと私たちの心が生まれつき傾いてい

ることです。そのような傾きの中で、サタンのとりこになってしまう私たちを、なお神の愛の内におらせ、主イエスの弟子としてとどまらせるものがあるとするなら、それは私たちの力ではなく、主イエスの祈りととりなしだけです（22章31～32節参照）。

それにしても神の御業は不思議です。過越祭の間に主イエスを捕えるのは避けようとした人たちの思いを覆すように、イスカリオテのユダが現れ、人間の悪しき計略がうまく進むことによって、過越祭のただ中で、主イエスはいわば新たな過越の小羊として、今や全人類の罪をとりのぞく神の小羊として十字架につかれるのです。罪深い人間の計略が実現するところで、実は神の救いの御業が成し遂げられ、神が敗北したと見えるところで、神の勝利が始まるのです。

さて、人間の闇の計略が着々と進んでいる中で、主イエスのご自分の行くべき道を見据えながら、弟子たちに一つの指示を与えられました。弟子たちと一緒に守る過越の食事の場所の事前準備のために、ペトロとヨハネを遣わされるのです。

主イエスは二人に不思議な指示を出されます。都に入ると、水がめを運んでいる男に出会うから、その人について行き、その人の入っていく家の主人に言いなさい・・・その主人は席の整った二階の広間を見せてくれるから、そこに準備しておきなさい・・・。水がめを運ぶ男などというのは当時のユダヤの社会ではまずいなかったそうです。今でいえば、日傘をさして歩いている男の人のようなものかも知れません。それは二人の弟子を目的の場所に導くしるしでした。ともあれ、主イエスは、この過越の食事だけは誰にも知られず、邪魔されずに、弟子たちと守らなければならないと考えられて、ご自分で事前に準備しておられたのでした。

ペトロとヨハネとは、まだ状況がよく呑み込めていませんでしたが、主の言われる通りに、主が用意してくださっている場所に行けばよかったです。闇の計略が進んでいる一方で、私たちの救いのために御業をすすめておられる神の計らいと備えがありました。

私たちは人間の罪と不真実の中にも、それを貫いて進められる神の救いのご計画を信じ、主の招きに心を開いて応えていきたいと思います。もちろん、主イエスにお仕えしていこうとするところでも、私たちは思い悩み迷います。時に間違った判断をしてしまうこともあるかもしれません。けれども、自分の知恵ある計画や企てが決定的な事を進めるのではないのです。私たちの思いを超えたところに主のご計画があり、主の備えがあり、その主の導きの中で、私たちの考え計ることは用いられるのです。ですから、主のみこころがなりますようにと祈りつつ、御業に仕えてまいりましょう。